



Title	<資料> 生活記録運動を振り返って：調査記録
Author(s)	竹内, 久子; 林, 先; 林, 正子; 伊藤, 常子; 岩下, 孝子
Citation	社会教育研究, 26, 59-78
Issue Date	2008-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/32420
Type	bulletin (article)
File Information	5-ad.edu26.pdf



[Instructions for use](#)

< 資料 >

生活記録運動を振り返って

- 調査記録 -

竹内 久子・林 先・林 正子
伊藤 常子・岩下 孝子

はじめに

以下は、東亜紡織泊労働組合において生活記録運動に取り組んでこられた方々へのインタビュー記録である。インタビューは2006年8月4日に、飯田市竜丘公民館で行われた。

周知のように、生活記録運動は戦後の日本を代表する学習実践として多くの注目を集めてきた。鶴見和子は実践に関わりながら、生きることと学ぶことが一体化したこの学習実践の歴史的意義を探求していたし、その後も乾彰夫・大串隆吉・辻智子らによって、学習の展開論理に関する検討が積み重ねられてきた*。彼女らの生活記録文集は『母の歴史』、『仲間の中の恋愛』等として刊行され、2002年には復刻版が日本図書センターから出版された。復刻版の刊行は、辻の持続的な探求によるところも大きい。

このインタビューは、学術的な意図に基づくものというよりは、生活記録運動について学んできた学生たちの学びの機会として実施させて頂いた。その経緯や参加者は本誌前号に記したので、ここでは割愛する。学生たちにとって、生活記録の当事者の方々から直接にお話を伺えたことは、無上の喜びであった。「生きることと学ぶことの統一」と口にすることは誰でもできるが、その実際の困難さや意義を目の当たりにすることによって、学生たちはさらに深い課題を自覚した。「学生さんのために」と、わざわざ集まって頂いた皆様に、改めて深甚の感謝の意を表したい。

以下の記録の掲載にあたっては、ご本人たちに確認をして頂いたが、記録段階で不鮮明な箇所があり、発言者を特定できないままの発言が残っている。大変申し訳ないが、それらは(不明)と記した。なお、生活記録文集との関連もあるので、旧姓を以下の括弧内に記しておく(敬称略)。竹内久子(鈴木久子)、伊藤常子(登内常子)、林先(吉沢先)、林正子(林正子)、岩下孝子(伊坪孝子)。

* 鶴見和子、鶴見和子曼荼羅、藤原書店、1998、乾彰夫、戦後日本社会における青年の自己形成と人間像、東京大学教育学部紀要 21、1981、大串竜吉、生活記録運動 戦前と戦後、人文学報 150、1981、辻智子、1950年代生活記録サークルに見る『女の問題』と自己表現、人間発達と社会教育学の課題、学文社、1999。なお、拙稿、成人学習論における記録分析の課題と方法、日本社会教育学会紀要 43、2007、も生活記録について言及している。

宮崎：四日市に出て行かれたときの状況と、そこから暮らし始めて生活記録に関わっていかれた経緯、どういふ風にこの運動に関わっていったのかということですね。実際にどんなサークル活動を当時なされていて、書く中で自分自身が、その当時ですけれども、どのように変わっていったという風に感じてらっしゃるのか。さらに退職されてから、こちらに戻ってこられて生活をしていく中で、書くということはどんな意味を持っていたのかということも、お話頂ければと思います。ですからご自身の人生を振り返っていただいて、16・7歳くらいのときですかね、そのときの状況からお話いただければと思うんですけども。

林(先)：なんかおかしいけれどねえ、恥ずかしい話ですが、わたしたち卒業する時には、なかなか高校にいけない時代だったの。お金がないのと、家柄とか、お母さん達は頭よくたって、学校になんか行ったら笑われちゃうとか。世間体をいう時代だったもんだから、勉強できるところへ就職すりゃあいいじゃないかって言われて。東亜紡織泊工場っていうのが、会社に学園があるっていうことで教えてくれて、そこにいったらどうだということで、集団就職したわけ、みんなが。わたしたちよりも、ちょっと・・・あんまりできが悪いなあって思う人でも、家柄が良かったり、昔からの、金持ちの人は、行ったんですけど、私たちみたいな貧乏は、行けなかった。反対されちゃってねー、親にも反対されて。先生はでも「高校に行くように」って言ってたけれども・・・そういう状態であって。それでも高校に行きたいなあ、というのと保母さんになりたいっていうアタマはあったんです。学校行かん事には保母にはなれんしー、そして就職して、・・・学園はあったんですけど、まあその学園が、ちょっとわたしたちにはなあ、わたし達の学園が、認可がおりておったのかな？

林(正子)：認可がおりてなかった。高等実務学校だったんで、世の中では、高校出としてはつうじなかったんだけどもね。帰省の時の運賃の割引きはあったけど。

林(先)：そういうことで、私の場合は、工場で働いて、その当時、最初の給料が871円の給料だったの。そのなかで500円をうちへ送って、あと300円が生活費で、石鹸を買ったり、洗濯用にね、粉石鹸買ったり、全部そういうのに、ああ洗濯機なかったから粉石けんじゃなかったわね、そういう状態でくらし・・・それからこれじゃあ、どうももの足らん、これじゃあつまらんって思っておったら、そこに東亜紡績の組合活動があって、文学サークル・音楽サークル、あとひとつあったよな、・・・演劇サークルという、そういうのがあって、なんていうのかな、あたしたちがそういうのにひっこまれてしまっちゃったわけ。

岩下：ひきこまれていったって、おかしいけどね。

林(先)：そのほうが魅力があったと云うか。

林(先)：そっちのほうがたのしくなっちゃったの。あたしたちにはね。学園の勉強で、会社のためになるような勉強で、一般的な高校の勉強っていうのも実はあったけれども、洋裁和裁、お花とかそういうのを習っておけば、いい嫁様になれるっていうそういう修行ばっかだったもんで、わたしたちにはなんかも足らんな・・・っていうときに、そういう組合活動があって、演劇活動、音楽サークル、にわたし達は入った。それから文学サークルがあって、その仲間達と活動したっていうわたし達の経過がね。あたし自身の経過では、そういう風にやってきたんですよ。演劇サークルで劇をやって。衣装から全部自分でやったね・・・。

宮崎：シンデレラ、リア王・・・。

林(先)：リア王やったりとかね。・・・それから「虫の世界」。「虫の世界」をやったとき、会社からなんか・・・ねえ。圧力があつたりとか。「虫の世界」で云うのは、大勢でいきゃあこわくないっていう、「まとまれば怖くない」っていう、そういう筋だったもんで、会社ではそういうのいかんと云われて、会社のためにならんって指摘されちゃって、なにしろそういうことから会社から圧力かけられたよな、あたし達は余計まとまっちゃったのね。不思議に。なにいうの、あたしたちはなににも悪いことしとるんじゃないて云って。

岩下：そういうことがまとまるきっかけになつたて云う気がするんですけどね。それで仲間達がすごくな

かよくなったと思う。

林(先): ビルマの豎琴だとか、ああいう芝居やったり。

宮崎: そのときは文学サークルも? 文学サークルと演劇サークルは当然別ですよね?

林(正子): 並行してやってたね。

宮崎: そのときに書くことはもう始まってたんですか?

林(先): そう。そのころからね。

宮崎: じゃあ、複数に入って活動されてたわけですか。

林(先): 全部、どのサークルもね、文学も演劇サークルも入り・・・みんな入ってね。

竹内: みんないろいろ一緒にもうなにもかもです。文学も一緒に、演劇も一緒にやるっていう、音楽も一緒にやったしね。

林(先): その時だったなあ、「わたしの家」を書いてみるとか、まずは「お母さん」を書くかっていう話になったんだよなあ。

竹内久子: 最初は、まずは文化活動ということで、まあやりだしたんですよね。文学とかいろんなことをやって、最初はもうキレイごとばかりで・・・。澤井さんが文化部長だったんですよ。そこで書くことをしようということで、文学だと。最初はとて素晴らしい文学を思い書きまして。それから、こんなものは文じゃないと、もう亡くなったんだけど、訓覇さんなんか批判されて、じゃあどうなんだということに、まあいろいろそんなときゃあ迷いもあって、そうしているうちに、やっぱ「山びこ学校」に出会うわけなんですよね。それで、ああこれだ、ということになっていくわけです。

伊藤常子: 「山びこ学校」の、本を読んで、それにうんと刺激を与えられ、そういうことならわたし達だってかけりゃあしないかって、似たような境遇っていうかそういうあれだね、ってそういう共感をよんで、じゃあまずは自分の家のことから書いてこうっていう。何で農村は貧しいんだとかって言われて、どういふことかなあって、じゃあまずは自分のうちのことから書いてみたらどうかなあっていうことで、・・・まあ、恥っていうか、恥ずかしいことはいっぱいあってもそれをさらけ出して、やまびこ学校みたいなことを書けばいいんじゃないかっていうことで、「わたしの家」っていうのを一番最初に出したんです。それが出て、あのさっき、ひさちゃん(=竹内)が言った訓覇さんっていう楠工場の人なんですけれど、一人ひとり書いた文をみんな批評してくれて、そしてあの、そのそれぞれに、一人ひとりの良い特徴を汲んで、励ましてくださったわけです。それで、もうすごいみんな感激して感銘を受けた・・・あの、本当に新鮮な。子どもだったので、あたし達は何も知らない事ばかり、子どもだったので、褒められたっていうことや教わったっていうことがすごいあったので。・・・まあ、あたし自身はその、自分のことについて書いてもらったばかりではなく、多くの書いてもらった人たちのも読んで、そのことについて、ああ、その人の書いてあることにこういう風に書いてくれたんだ、ていうことで、それをうんと人生の生き方のキホンっていうかそういうものをそこで教わった気がして、つい自分はそういう生き方をしていけるような人間になれればいいなっていうような。まあたとえばひとりの人が農家で、とても凶作で田んぼができなんだけど、しょうがないそりゃあ、運が悪かったっていう風に家の人たちはあきらめてしまったっていう風に書いたんですけど、そのことに対して訓覇さんは、「それは運命って諦めてしまっちはいけない。自分で道を切り拓いていかなければいけないんだ」っていうことを批評に書いてくださったことがあって、それを見て、私自身もその境遇から、「ああ、それを運命と思って諦めてしまっちはいけない。自分でその道を切り拓かなければいけない」っていうことをそのときに本当に教わって。それが自分の人生の柱となるくらいの教訓をいただいたんですよね。そんなことで、あの、自分の人生が、そこで初めて、できはじめたっていうことがありました。

宮崎: 訓覇さんっておっしゃる方は、この本の、丘の木しげるさんと書かれているんですけど、その方ですか?

宮崎: ペンネームですよ、丘の木しげるさんて。

竹内：ええ。会社の重役でしたもので、名前を出すと、やっぱり会社のほうから・・・そんなペンネームで。あたし達も、随分いろんなペンネームでね。まあ、いきがってんのもありますけれども。おもしろくやりました。麦畑生子（ペンネーム）とか。

林（正子）：28年ごろまではね、労働組合も、生活記録は奨励するってね、労働組合も強かったけれど、その後は会社に都合が悪くなって、全然変わって来て、御用組合化してしまったで、そういうことになってくると、組合の役員も、生活記録を批判する・・・。それから、あたしたちの、苦しい戦いじゃないけど・・・。あの、澤井さんも首になって。裁判が始まったりしたものでね。30年ごろかな？そのころからずうっと。

伊藤：生活綴方を書くことによってね、お互いに仲間同士の、連携が強まったりね、組合員の意識も高まったりとか、そういうのが会社としてはおもしろくなかったもので。それで、リーダーになっていた澤井さんを、まず、作文教育の研究会に出席したのを、休暇をとって行ったんですけどね。その、休暇をとる理由が、違っていると言って、首にしちゃったんですよ。そこからもうあたしたちの戦いって言うか・・・会社との・・・弾圧を受けたって言うか、いじめられたあれが始まったんですけども、会社もこのことをうんと恐れた。たしかにね、うんとまとまりが良くて、本当に組合が強くなりつつあったわけです。みんな中学卒業したばかりだから、なんにも知識もなかった者が、そういうことから段々知識も深まったりして、いろいろわかったりしてくるのが、会社としては面白くなかった。

竹内：そうです・・・とにかく、書くということは、文字にするっていうのは、とにかく書いて出すわけですよ。それが一番怖かったんですよ。本当のことをありのままに・・・。文章は上手下手はどうでもいいわけだから、本当のことをありのままに書こうっていうそのことが怖かったんです。何か言われるとそのまま書いちゃうから。職場で、ちょっと上役のひとに「こんなことどうしてやってるんだ、やめりゃいいじゃないか」みたいなこといわれると、そのままそれを書く。・・・だから、物を書く、残される。そして発表される。もうそのことが大変怖かったんでしょねえ、会社は・・・で、まあ、可愛い娘たちが、今言ったように、鼻先だけど、どんどん強くなっていく。私自身もそうだけど、組合員で闘争するわけですよ。わたしは親に、「誰の言うことでもはいはいって聞いて、一生懸命真面目に働いてな」っていうことを教わって、育ってきた娘が、行ったら、「この給料じゃもの足りねえ、もっとあげてくれ、もっと出せ」って、それをやるということは、大変な驚きだったでしょうねえ。そこで、「ああ、わたし達は黙っていたらこのままだし、やっぱり闘わなきゃだめなんだ」っていうことをそこで教わって。家の人たちにも、要求を出さなければ何にもわたしたちは変わらないんだっていうことを手紙に書いた覚えがありますね。そんなことばかりですね。

宮崎：組合の組織率は非常に高かったんですね。組合にはほとんどの人が入ってた・・・

林（正子）：ええ、そうですね。もう全員参加ですので。課長とかそういう人たちだけを抜いたもので。終戦直後に、労働組合は何処の会社も作らなければということがありました。でも、それは本当に常識だったんで、今は全然違ってきましたけど、あのころが本当の労働運動だったんだっていうような気がしますよね。国鉄なんかも、随分強かったし。そしてサークルがもう全国にいっぱいあって。サークル活動・青年活動がそれはもう本当に盛んだった。それがだんだんと下火になっていくわけですよ。わたし達もそれに従って、それをそのまま、あたしらはやっていたから、いじめられたというか、弾圧があったわけだけど。会社だって、はじめはうんと良心的。

岩下：いろいろいわなかったしね。

林（正子）：いい会社ということで、あたしたちにも実務高等学校もあるんだよって、希望を持って入社した。

林（先）：会社で怒られたことなんかをさーっと書きちゃうわけなんで、作文になって、文集になってしまいうんだからね、悲しかったんだろね。

林（正子）：食堂なんかもね、とつても一生懸命。いいものを食べさせようという気運もありましたし。他

のところのお料理よりもいいと。家でろくな物を食べておらなかったということもあるけど。

岩下：あたし達が入った26年・・・学園はすごい盛んでネ。

林(正子)：みんなほとんど入っていったし。社会とか国語・・・保健衛生・家庭科・洋裁・和裁・毎日あってね、5日間。あたし達交代なもんで、午前中に2時間とか、午後と夜は一緒に2時間とか、それが3年間あって、そのあと研究科で、辞めてくるまでずっと洋裁も和裁も料理も、お花・お茶・花嫁修業的な事は続けてやれました、その点では、本当にやろうと思えば洋裁だってほとんどのものはできるような状態だった。

岩下：本当に良くやってくれたんだと思う。学園にしても。

竹内：だけどそれをもう一つつっこんで、もうすこし本当に学ぼうと思えば、それを本当にやろうと思えば障害があったってことですよ。学園にはそんなんじゃないで、もちっとその、こういった学科も増やしてくれ、芸術の学科も増やしてくれ、みたいなこといったら「そりゃだめだ」ってことになって。

林(正子)：あの頃は、社会教育っていうようなそういう勉強の仕方であたし達は教わってきた気がして、自分ではいるけれども。

伊藤：あのころは大学とかみんな行っていくわけではなかったから、今では大学はいっぱいだし、勉強の場もあるんですけども、あたしたちのときにはそういうところがなかったですから、だから組合の文化活動っていうのが、社会教育っていう・・・あのなかでの勉強したり、知識を得たのかなと思ってますけれども・・・。

林(正子)：よくね、名古屋だとか大阪だとか、母親大会があったら行くし、誰かの講演会があったらいろんなところ行く・・・、好奇心旺盛にそういうことをしてきた・・・いまもやっぱり。夏期大学あるっちゃうたら、行ってみようかとかね。

伊藤：名古屋大学の先生とか、そういう先生が市役所の関係から夏期大学とかそういうの大切にしてくれて、そういうのはよく澤井さんが交流があるんで澤井さんが教えてくれたから、聞きに行ったりして、そういうような勉強もしてきました。

林(正子)：新しい本がでると、沢井さんが本の紹介とかしてくれたりした。伊那へ帰ってから本を送ってくれたり、通信に書いてあったり。

林(先)：こっちきても、やっぱりそういうことをやってきたもんで、近くの村に夏期大学があるとか、飯田になにか講演があると云うと、目の色輝かせて見ており飛んで行く。一人でも飛んで行くとか、勉強したいなって思うときは飛んでいける云うのもやっぱり、そういう時分からやっていたりの、綴り方をかいたり、興味があったから行けるで云うんじゃないかなって思っておるんだだけ。今の生活に。今この歳になると、足を丈夫にしておりましようって、じゃあストレッチ体操とかにもね、近所の人は、行かんといわれても私は行くってあたしはとんで行ってしまっただけ。そういうのやっぱり、自分からも、進んで出来るで云うのも、そういう綴り方をやってきたり、文化活動やってきたんでそういうことおっくうなしに、一人でも飛んでいけるっていうのは、仲間達として来たからじゃないかなあって思ったりしてるんですけども。

(不明)：今までのことも、今の生活を、なんとかならんかと作文書いてな・・・

宮崎：さっきの、活動中の話に戻って、労働組合っていうのが、「黙ってたら何も変わらない。要求しなきゃならないんだ」だけどもみなさんは、こちらではね、「はいはい」といって、人との関係作るんだって言われてきた。そうすると、自分が15、6まで育ってきた中で学んできた生き方と、労働組合で自分が新しく求めている生き方が、違う方向に向きますよね。自分の中で2つの魂が生まれるような状況になるし、あるいは実家のお母さん達からも心配されたりして、結構大変な状況だったんじゃないかと思うんですけど、その辺りもうすこし・・・。

竹内：それはそこにも出てきとるんじゃないかと思うんだけどね、大変でした。わたしの場合は募集入っているのがなんとなくイヤで。そしたらあたしたちの会社は職業安定所を通して学校に募集をかけた、職

業指導の先生から紹介があって、そしてわたし達が会社行っていく手順だったわけですよ。それまでこの地方は養蚕っていうか、蚕ね、製糸が盛んで、わたしらの村では、募集人の人が、村の中をまわって歩いて「働きに来てくれー」となんだかんだちゅうて、募集していったわけ。その姿をみていると募集人っていうのがわたしはいやだった。この募集人、その人が入ってないんだっていうことでわたしは気に入らな、入社しました。ところが入社してみたら、いえおりました、募集人。そしてそれが会社と、わたし達と家庭等を結ぶ、人たちだったんですよ。その人があし達の手紙を持って、うちを回り、また他家の親の手紙を持って、あし達のところに、回ってくれるという、そしてときには送金のお金まで、もって行くという橋渡しをしたんですよ。それがまた、あそこの娘はああだ、この娘はとてもいい娘でよく働く、あそこの娘はちょっと問題ある、ってみんなに言って歩くわけですよ。そういうこともとてもイヤだったし、会社も1年に一回かな、父兄会っていうものをやりまして、そこでみんな親達集まるわけですよ。お世話になってる子がいる会社が、そしてなにか景品をもって行くわけですよ。あのころみんな貧しいから、なにももらっても嬉しいんでね、みんなそれにつられて行くんです。するとそこへわたし達がサークルをしてるとか、「だれだれさんのお母さん来てください。あなたの娘さんはこういうことしてますよ。絶対やめさせてくれ」と、みんなの前で言うんですって。そして親達は「辞めさせますとも、申し訳ございません」つって、おうちへ帰る。その次の手紙には「もう辞めてくれ、もう辞めてくれ」つ、わたしらのところにくるわけですよ。もう、そういうことの連続でしたね。

でも、やっぱサークル、こういう仲間がいるから、来た・来た！っていつて喜んでもう、すぐみんなで書きちゃうわけですよ！（笑い）だからもう、会社は本当に、そりゃ困ったわねきっと。

林（正子）：こっち帰ってきたときに、生徒指導で泊工場へ来ていた、校長先生とかがな、「ちょっとあれやりすぎなんじゃないか」つて。言われたことあったけれども・・・。私達にすれば会社方がやりすぎで募集人に色々呼ばれて、「赤の手先のことは辞めろ」とかなあ、「赤いところにひっぱられちゃいかんで」とか言われて。母親の手紙をもらって、親が心配してるっていうことと言われて。それでも、親は結構子どもを信用しとるでって手紙来たりして・・・

竹内：やっぱな、村の中でもなー、文化活動とか、青年会活動とかあるし、そんなことで腹ん中では、会社のやることだ、そんなことだろうということで、わたし達を信じてくれましたよ・・・ねえ？親も。

岩下：私たち自身もなんで会社の、偉いさんたちがそんな夢中になって辞めさせるってなあ、いちいち呼んで、言うのかっていうこともわからない・・・。ほんとのこと書いただけなのになあ、なんでこんなこと起こるのって感じて。まだそうね、わかいからね、何にも知らないんだ、ほいだもんで、うんと抵抗を感じたのよ。

岩下：そうやって圧力かけるから、余計みんな固まっちゃってね～。余計書いたりいろいろ弁たつようになっちゃったのをやりすぎつて。そういうところから出てきてると思う。向こうがそういうんだからこっちもならざるを得ないつていう。

竹内：全部ね、ただ「赤が入り込んでいるんだ」「指導者が、共産党が入り込んでる」とか、そういうことに結び付けた。

林（正子）：あの、会社が恐れているほどあしたちはそんなに成長してないし、力もないんだけど、自治会の役員に、改選時期に立候補すると、もう絶対仲間の人は入れるなって。もう寮・・・部屋の人たちも呼んで、そして寮の先生が説得するんだ、工場長とか課長とかそういう人も来てするんだけど。でもたまにまた入っちゃったりさあ。入っちゃったりすれば結構・・・それで一年なあ。やったし。

伊藤：本当なあ、民主主義の世の中だから、やっぱりそういうことだもんで、静かに会社はさせとけば却ってそういうことにならなかつたつてあしは思うんですけど。あまりになんとか、やんやんやつつく・・・。だから会社は下手だったんだー。

竹内：そりゃみんなそのときの、なんて言うんだ、その社会情勢、そういうものはみんなそういうことになってた・・・つていう思いですよ。わたし達の会社だけではなくて、それに会社は準じていたつてだ

けて今は思うけど。でもその頃から多くの組合が御用組合化してくからねえ。

宮崎：さっきサークルの雰囲気ですこし出されましたけれどもね、お母さんからの手紙が「あんたんとこ来た？」とかって。かえってみんな元気になったって・・・

竹内：あれで辞めていく人も結構いましたよ。もうほとんどね、ほんとにどんどん参加して、魅力があるわけね、演劇をしたり、とにかく、女だけの職場だからね、男の人はほんとに少ないわけですよ。青春盛りやっぱり男のって魅力あるわけですよ。でも、唯一若くてきりっとしてるのは、労働組合の役員たちだったので、その人たちがいろんな指導してくれるわけですよ。労働組合の集まりなんかに参加してこないかとか呼びかけも来るし。すると、わたしたちはそういう男の人たちと平気で話し合いが出来てるわけですから。みんなそれ見てるととても羨ましいわけね。そんで誘うとみんな入ったの。だけども、やっぱりなんとかかんとか言われて、段々辞めていきましたよね。それで、最後まで残ったのがこういう人たちだったということですけど。

宮崎：実際の活動状況なんですけど、どういう状況で活動されたかっていうことなんです。具体的なサークル活動の様子をもう少しお話いただけませんか？

竹内：やっぱりね、歌をうたうことから始まったのかねえ、青年歌集っていうのがありまして。ロシア民謡なんかもよくあって。そしたらお前達は自分たちの国の歌うたわんで、なんで共産党の、ソビエトの、そんなロシアの歌うたうんかって会社から言われたりして。その歌集をね、みんなで何処行っても歌いましたね。

岩下：よくね、野外で・・・キャンプとかやるときとか、行くときにバス中でうわーっと全員みんなが歌ったりして。でね、すごいもう活気があったんですよ。そういうのにみんな力づけられたりして。

竹内：それはね、澤井さんの力ですよ、やっぱり。そういう、青年歌集をみんなの中に入れてくるとか。それでみんなが楽しく歌を歌う。そしてそれをもうちょっと、なんていうかみんなの、結びつきをするには、やっぱり演劇だという。だからおんなじ人たちがみんなやるわけですよ。演劇やろうって演劇やると、演劇っていうのは一つのもの作り上げるのにみんなの力が必要で、主役もありや端役もあり、衣装をするだって、舞台には出ないけど、陰の力もあり、そういうこと身をもって学んでいくわけですよ。そいでもう、いやだいやだ、今日はやりたくないっていう人をなだめて、じゃあ行こうよ、みんなで行こうよっていうわけで。一つの演劇を完成させるには、本当にいろんなことがあって、やっと一つの発表が出来るわけです。なんでもそうだけど。そんなことでみんなの結びつきがあって、そんでやっぱり、学校の、「山びこ」に行き当たったという・・・。とても、良くなってるんですね。だからやっぱり・・・。

林(先)：澤井さんは文学も音楽も、それと演劇も。ずーっと一緒だったもんねえ。もっと最初にぎやかに出来たのは、演劇とか、音楽とかだもんね。文学はみんなかくのぼらばらだから、丸太んぼうを積んだ山のようにって批評をもらったんですけど、文学の方はそれ以後「山びこ学校」が出てきてから、すごい刺激を受けて、それが活発になった。演劇と音楽は・・・最初からずっとにぎやかだったかな、活発だったような気がする。

岩下：だから演劇と音楽でむすびつきができていたような気がする。

宮崎：たがいにそうやって結びつきができていく人同士のあいだで書いているってということですか？

竹内：そうです。歌うこと演劇する、文学にとみんな入ってました。そして、山びこ学校に行き会う。『本当のことを書く』。あたしたち、なんにも知識もないんだから、ただ、本当のことをありのままに、書くって言うことなら、あたしらにもできるっていうことでしたよね。・・・絶対上手下手は考えない、ありのままに。・・・大人になれば、難しいです。

宮崎：そうですか。

竹内：子どもだからありのままに書いて父ちゃんと母ちゃんが喧嘩した、そしたら父ちゃんは何でそんなこと書いたんだっていうことになっていくんでしょーうけど。

岩下：だんだん、ひっかかっちゃうのよね。お父さんにいろいろいわれるんじゃないかと考えちゃうし。

知人との関係もでてくるし・・・。娘時分だったからかけたのかもしれない。

林(正子): 会社のこと悪く書くのは平気だった。会社のこといくら悪く書いてもいいけど、友達のこと悪く書けないでしょ。だから良かったんですよ。労働闘争とかも、つぎからつぎへ起こってくるもんで。そのことを書いてそのことを話し合っ。なんかないと書けんとかいいながら・・・だから、文集は月に一回、つくろうっていうんだけど。順番に係り決めて。日曜には、月に一回労働会館の広間借りて、大体午前中話しとったなあ。だんまりが多かったけど。だんまりが多いと、最後に澤井さんに怒られて。

宮崎: 月に一回労働会館にあつまったのは、集会のようなものですか？

林(正子): 記録する会の総会っていうか・・・総会は月にいっぺんだったけど、それ以外も集まって歌ったり話したり・・・。

竹内: 労働会館っていうのは、澤井さんが首になって、そのあと地区労に就職するんですよ。会社で給料もらえないから、どっかで働かなければならない。そしたら、地区労に働きに来ないかってことで。三重県四日市三泗地区労働組合協議会事務所。なんか、そこにいろんなものがある。その中の、書記として、就職するんですよ。その労働組合が労働会館の中にあつたから、そこへ、寮を抜け出して、そこで色々話し合っったっていうことでしたけど。そんでまた、澤井さんが労働の解雇ということで裁判をするわけで。それをわたし達みんなで応援して、続けていたので、その会館を借りました。

宮崎: 月に1回四日市に集まったときは、文集の編集のことも話し合われたわけですか？

竹内: ええ、なんでもやりましたし、寮の中でもやりました。もう、わたし達いっしょの寮でしたので。年中、暇で体はあいてます、食堂に行つて三食は食べられるし、働いて、時間外はもう暇ですよ。だから、いつも集まつてしゃべつてましたよね。今日はななにの編集の・・・なんちゅつて、文集作りの何々をしよう。当番が決まつて。自分たちで、記録係だ、何係だつて決めて、そうして自分たちでガリ切つて、刷つて、文集を作つていた。それで、労働会館に行くのは月にいっぺんで、まあ、いろんなもろもろ楽しみながら、そこでまた話し合いをすつとか。そんなもんだつたかな。そいで、澤井さんがそれで叶いっこないのに、鈴鹿学園とあつたちとの交流会、その人たちと労働会館で話し合いをしたり。とか、いろんなことやりましたね。だれだれが来るからこないとか。

伊藤: 三組の結婚式もね、その人たちの関係でね・・・。

宮崎: この辺で小休止しましょうか。これまでのところは、まだサークルが始まつた段階の話で、全部50年代の話なんですけど、その段階までで、いくつか確認したいことがあります。

竹内: あのね、あつたちつてのはほんとに高度の勉強したわけでもないし、学校でたわけでもないから、知識もないいで。でも、社会勉強つてのはこの歳までしてきました。それだけのことですから、ほんとにみなさん申し訳ないです。まとまつてもいいないし。

宮崎: 一番最初に言われてた、家柄で学校に行けないうつていうことですけど。

竹内: あのね、家柄つてね、あの大体昔、ほんとにここの戦争後、終戦後から本当にすごい変化の仕方ですよ。わたし達は戦争、終戦になつて就職したわけですよ。そのころ、皆さんわからないと思うけど、家族制度とか、差別。そのころ土地解放つて言うか、ありました・・・地主つて言うのは随分そこで、なくなつたけどまだその時点までに家柄つていうのがとてももう大事にされて、結婚するにもまだあそこの娘はその家柄、あの娘とこつちの息子とは家柄が合うからいいじゃないとか、昔は親同士が結婚させてましたからね。それまで。自分の意志で結婚する人なんてのは、ほんとに少なくて、今考えるとちょっと皆さんわからないと思うけど、封建時代、そういうものが本当に残つて。貧乏じゃないんだけど、家柄、地主の人たちは裕福だつたし、小作のようなあんなところから、高校行くなんてもつてのほかだという風習もあつて、だからうちは恥ずかしくてそんなの出せねえとか。もしかして、苦労したら出せるかもしれないけど、うちなんかが行くところじゃないと親が決めて付けているとか。ちょっと家柄がいいうちは、少しきつても、子ども達は高校に出してやらなきゃならないと、出さなきゃ面子がない。皆さんそんな風なのちょっとわかりませんよね、そんな風でした。そいで、あつしも50名ばかりいるところで高

校に行けたものは、5人いたかなあ、4人かな。

岩下：ほんとに変な話が、あたしよりよっぽど出来ないような人が学校行けて、あたしたちが学校にいけないっていう、そういうのがあったんです。そのころは、あたし達のころから3年過ぎると、誰もかれも高校行けたわよねえ。わたしの時代にはそういうの言われたね。ほんとにお母さんにいわれた。うちんかが高校いったら笑われちゃうって。

木下：生まれは何年・・・？うちの母と近いのですかね・・・？

岩下・林（正子）：あたしたちは10年生れ。

竹内：ほんとに貧しかったですよ、行けるとかいけないとかでなく本当に貧しかったです。

（不明）：終戦直後だからね・・・

伊藤：よくてもやっぱり貧しいちゅーので行けなかったとか。

先：そう、貧しさが先にたったね。親達がお金をとるってことは、養蚕・・・蚕をとって、そこそこと暮らしていたと云う。

竹内：ほんと、昔から男を産めばよくやったって感じでしょ、良かった良かったと。でもこの地方は違うでしょ、女を産めばよかったんですよ。っていうのは、女の子は製糸工場に行って稼いでくるから。だから、女の子をたくさん産めばよかったんです。それは、みんな口にはだしません。そういうことだったそうです。長男はとても大事にされたんです。長男が生まれれば、良かった良かった、これでこの家にも跡取りが出来た、って言うことで喜ばれたけど、あとは女のほうが良かったんです。そういうことで生計を立ててきたから、あたし達もいまさきちゃんがあったように、当然給料は家に送金すると、それは当たり前でしたね。

林（正子）：姉・兄がそうしてきたように。あたしもちゃんと、送金して。

岩下：みんなしたね。

（不明）：自分に金無いんで、働いた子どものお金に頼ってた。兄弟も多いし。

竹内：本当にネえ、いまは様変わりですよ。本当に。全然違っちゃったもんでね。考えられんけれども。でもね、そうしてるうちにだんだん意識が変わってくるもんで。わたしは弟だけは高校も卒業して大学もやるんじゃないかと、兄弟でもやりましたね、そういう風に段々世の中変わってきましたけれどね。それはもう誰も何も言わない。

林（正子）：それだけ親が教育を大事だって思わなかったんじゃないかなあ。

竹内：そう。そう、女は学ばさせることは無いと。学ばせれば、生意気になる。だから、いい嫁様になれないと。だから学ばせることは無いっていう。

林（正子）：本読んどると、仕事が出来んずくなしになるで、本は読むなっていうような親だったなあ。勉強はしろっていうんだけど、本や雑誌をよんどると、仕事ができんから読むなっていう。

宮崎：そのお母さん達は、みなさんが工場に行き強くなっていきますよね、それによって、お母さん達の考えっていうのは変わっていったんですか。

林（正子）：有線放送が入るようになったから、各家庭に電話もかけた、お知らせ等放送する、有線を聞きながら、やっぱり新しいことを段々お母さんたちも聞いたのかな？四年生しか出てないし手紙をくれてもほとんど漢字が入ってない。平仮名だけで書いてあるっていうような手紙だったけれど・・・そういう明治三十年に生まれとる人たちですから。花嫁修業的なことはきちんとしなきゃいけないけれども、それ以上のことはそんなにできなくてもいい・・・それで高校も反対したっていうか。やっぱり、本家の手前があるってんで、本家が誰も行ってないのに、うちばっか行かせるわけにはいかん、っていわれて。でも、いつつ違いの妹は行ったから時代の流れだね。

竹内：だから、その変わり方っていうのを、あたし達は全部見てきたっていう気がしますよね。あたしらが、会社に入ったときは、バスも伊那市から、伊那市が中心で各村へかえってくわけですが、そこまでは電車で帰ってくるわけですよ。名古屋を通過して、飯田線で降りて。するとそのバスがね、木炭でぼぼっ

ぼぼっと煙吹いてあがっていくんですねー。それもほんと1日にどれほどもなく、帰ってくるときはそのバスに乗れましたけれども、あたしらが中学生のときなんかはそんなバスなんかありません。あたしらはその4キロの道を映画を見るにしてもなんにしても歩いて、きましたよね。そのバスも、木炭で、ときには上がらなくなって、もう石ごろごの道ですので、乗客たちもみんなでどんどん押して、何とか上がったというようなバスでしたけれども、で、水道ももう、あたしは、学校から帰ってくると、汲み水ですよ。大きなかめがあって、そこへあの、集めて・・・あの、4・5軒かな、中で一応水道はあって、タンクの中に水を汲んで、それをあのうちのなかに汲み水でいれて、それをみんなお勝手だとかお風呂だとか使いましたね。それがもう今は水道になり、そして水道からお湯も出て。最初はみんなご飯を炊くにしてもみんなまきで炊いていて、そのうちに3・4年もするとすぐガスが入ってくるという今のような生活になってくる。そういうのを全部見てきましたね、あたしたちは。本当の、原点っていうのはあれだけ。まだ、水道もない、山の中に行ったら電気もないというようなところから、現在までね。

伊藤：もう戦後60年だもんね。

竹内：ほんと変わりましたね、3年、5年経つと今は5年でも昔だって言うけれど。変わって・・・それを見てきたよねーって話はするけれど。

伊藤：昭和の時代ほど、今までの歴史の中で変わった時代はないねえっていうけれど。

林(正子)：高度経済成長に支えられて、あたし達は生きてきたっていう気はしますけど。

竹内：だから、世の中の考え方も、あたしたちが綴り方を書いている頃は、誰だって人間なんだと。男も女もおんなじ人間なんだよねってとでも鼻っぱし強くしていたけれども、今はね、いはいえ今は女の人のほうが偉いですよね、男より。あはは・・・だから。

宮崎：世の中の考え方も、後を追いかけてきたというか・・・

竹内：そうですね、あたし達と一緒にね。だからお母さん達も、あたし達のことを段々理解してくれました。なんも子どもが悪いことしてるわけじゃないと。風紀問題って、会社がそれをたてにとっていた。もう塀の中には売店もなにもあり、お風呂もあり、ほんとに、塀のなかだけで暮らしてほしかったわけですよ。外の空気を吸ってほしくなかったわけですよ。ところがわたし達はもう、ちょっといい映画があれば走ってその映画を観たし、あの映画はいい映画だねーって、そういうことは活動の中でも、はやい話文化にかぶれたりすることが出来たわけですよ。

伊藤：ほんとによく行ったね、バレエがあったらバレエに行っだし、講演も聞きに行ったりまあ・・・

竹内：会社はまあ、そういうことはしてもらいたくない。外に出て行くのは、変な話男の人と遊ぶために、とそれを結びつけたわけです。それを風紀問題と言いましたね。そして、風紀問題を起こしてくれたら困る。そうするとすぐその、変な話、子どもができるとか、会社の責任もあるし、

林(正子)：親御さんから預かってる娘だっていうこともあったんで・・・

竹内：大事な娘さんを預かってるのに間違いを起こされたら困る。それが理由で、とにかく外には出てってくれるなっていうんで、募集員たちもそれをみんな父兄に言っているわけで。だから、あたし達の親は、うちの娘たちは、そりゃ風紀問題っっちゃうつはやってねえと。だからってということで、それは大丈夫だって言うことで信用してもらえたっていうかなあ。それで、なにやら勉強もしているってわかったのかな。

林(正子)：お金もちゃんと入れてたし。

竹内：そうです。みんなまじめだったつたに、ほんとに。お金もちゃんと送金したしね。

林(正子)：そうだね、貯金だってちゃんとしたし。結婚の準備もちゃんとしたし。そんで結婚式の費用までちゃんと出したし。そういう点では信用はあった。

伊藤：道具とかそういうのも全部自分でした・・・

武田：男の人っていうのはどういうふうにされてたんですか？ 農家とか？ やっぱ男の子だったら工場とかですか、それとも女の子が稼ぎ頭だったとか・・・

伊藤：男も同じような状況だった・・・集団就職。男は数が少なくて・・・

竹内：男ってというのはね、まあ労働、うちの仕事を手伝うっていう、それとね、男衆っていうのがあったんです。地主のところへ働きにいったり何かしらお金を持ってくる。それと、畑は労働ですよ、畑は父親の手助けができるということ。冬になると諏訪に行つてね、あのころ、てんやてんやっていう寒天作りについて、ほとんどの人が行ったといひますね。

伊藤：そういうのもしていたけれども、次男と三男と・・・

竹内：次男は何してたんだ？

伊藤：東京辺りにいってなあ、大工さんになるとか・・・

竹内：名古屋とかなあ。

伊藤：丁稚奉公みたいな形で、個人の商店へ行ってそこで住み込みで、働くとかそういうことが多かったような気がするなあ。近所のお兄ちゃんもそうだったね。

林(正子)：この辺に佐久間ダムとかが出来るころで、そこで、うちのお父さん達は土方に出とったみたい。良かったみたい。

伊藤：男の人はそういうのあるよな。

林(正子)：それからそのあとは、一宮だかどっかの機屋さんへ、行ってたけど。大工さんになるんだとか。印刷工だとか、そんなような仕事だとか。だから東京だとか都会に出てった。

伊藤：職は自分で身につけるみたいなことをしとったんじゃないかなあ。住み込みで職人になること。まあ、会社っていうのは無かったんじゃないかなあ、今のよう。

林(正子)：トヨタ自動車なんかなあ、トヨタなんかは大手、多くいたと思う。うちの兄はそうだった。トヨタ自動車はいうて、労働運動して、首になって。

竹内：終戦前、戦争前はそういうことあったけれども、終戦後は学校出た後職人になる人と会社に行く人といろいろ。やっぱりこの地方も会社が多くなってきたから。働きやすくなってきたのかなあ。

伊藤：30年以降とかの事かなあ。

木下：戦後・・・(？)・・・そこで就職できるわけではないと。

林(正子)：国鉄とか、そういうところでないと。

竹内：それはもう本当のエリート。なんていってねえ、あのころは国鉄はここのエリートだったとか。

まあ、人夫とか、山があるから山の仕事に就くとか・・・

武田：結婚したときは、女の人が揃えていかなきゃいけないとか、そういう慣習があったんですか？

伊藤：結納は男の人のところで、あとはこっちからは一切・・・

木下：結納だけってそうなんだ。

竹内：とてもとてとも。それはたんす一本くらいですよ。たんすを買えるくらいの値段じゃなかったかなあ。

武田：じゃあ、結婚式は？北陸地方とか、名古屋の方とか激しいですよ。人に、親戚だけじゃなくて地域の人に見せるっていう。そういう習慣はこちらのほうは。

伊藤：無かったんじゃないかなあ。

木下：さっき午前中に塩沢義男さんに会ってなあ、竜丘の。義男さんは65から70になるんだけれども、あの人は30年代、公民館結婚式をしたと。その話を聞いてみると、結婚するのに金がいって、貧乏だと、そこまですきんかったと。そいじゃあつつつて、塩沢さん夫婦は初めて竜丘で公民館で会費制で結婚式をやったって、そしたらそしたらみんながワーツと続いて、次の年子どもがいっぱい生まれたっちゃう。そんくらいこころでも結婚すんのもお金がないとできんっちゃうことは、それは昭和30年代だったっちゃうことやなあ。

竹内：それはほんとに、女の子を嫁がせると、うちの中のたんすが全部空になるって、言われましたよね。ねえ。そいで着物を作って持たせなければいけないっていうようなこととかね。終戦直後も改善運動って言って、座布団は5組、5枚持っていく、普通の布団はまあ二組、とか、そういう風を持っていくものを

決めて、で、青年会の役員がそれを調べに来るとか。そんな風になって。こころへんはあまりね、荷物は大変だからえらいぞっていうそういう雰囲気はなくなってきましたよね。

林(正子): 36年に結婚したんだけどそのときに天竜峡ホテルの結婚式場でしたの。そしたら向こうの親がすごい悲しがって、結婚式場で寄り合いでしたけど、やっぱり向こう行って披露宴してねえ、あたしが押し切って結婚式場ですするって頑張ったので、強い嫁だと、思われた見たい。

竹内: みんな大きなうちでね、

林(正子): 自分のうちでやるとかやりたいっていうのになあ。

竹内: だからおおきなうちが必要だったし、大きなうちだと財産があるということだった。

宮崎: それでは話を戻していいですか?生活記録のこともう一回戻ってなんですけど・・・

先ほどのお話だと、書いたものについて霸辺さん、丘の木さんがいろいろ批評してくださって、それが大きかったって言う話だったんですけども、やっぱり澤井さんや丘の木さんや、そういった人たちが書いたものを批評してくださることが大きかったんですか、それとも仲間内でお互いに批評しあって、話し合ったって言うことが大きかった?この質問の延長には、鶴見さんも関わったと思うんだけど、鶴見さんの影響っていうのはあったんだろうかということもあります。

竹内: あのね、鶴見さんのあたしたちにしてくれたことは、書く指導じゃなかったんです。本を出すときに、木下さんと、東大の日高さんと、あの人たちが、わたし達の「母の歴史」なんかの紹介があって、できたんですよ。その力が大変大きかった。

伊藤:(出版社?)へね、あの、本を出したい紹介とかをしてくれたりとか。それで評価を、サークル活動の評価を書いてくれたりした。

竹内: 生活綴り方とはこういうものだとか、広めてくれた力は大きかったと思うけど。だから前もちょっと言っちゃったけど、鶴見さんは作文の会なんかであたしたちを知って、個々のなんていうのかな、「そうなのー」、色々話をこう「そうなんだ~」とか言って大変褒めてくれたり、共感してくれたり、「そうなのよ~」なんつって話し合いを持ってくれたりして。それで今度あとそれを自分の発表の場に持っていくというようなことで。一人ひとりの指導、あなたあなのよのようなのよ、みたいなのは無かったんです。

伊藤: 集団活動の活発化なんかをうんと羨やましがった。それを生活記録、あたしたちの生活記録のことを羨やましがって、自分でも東京で生活綴り方の会を作って、それで仲間も増やして、お友達をつくったんだけど、ちょっとあたしたちのとは質が違うかもしれない。知識の高い公務の人たちが多いと思うんですけど。本も「エンピツをにぎる主婦たち」とか出してる。

竹内: だから鶴見さんはいっつもあたしたちに言うんですけど、「も~、あたしいっつもうんとお世話になってね~」っていうと、「もー、そんなんじゃないのよー。わたしがあなたたちに学んだのよー!わたしがお世話になったのよ」って。よく言ってくれましたけど。

伊藤: 劇団との交流のときもねー、「劇団の人たちがあなた達から学んだのよー」って。そういう風にいつてくれたり。すごい褒めてくれました。

竹内: それはほんとにあたしたちへの過大な評価だとは思うけれど、でも腹のそこにね、たぶんそれはあるかなって。(笑い)って、あたしは思いました。

林(正子): 結局あたしたちは生活者なんだよなあ。

竹内: そこからそういう本当の底辺の声が、鶴見さんのところにいく、そこから鶴見さんは学んで、それを、なんですか、学問として、広げることができたっていうか、わたし達も一つのその、鶴見さんの学問のひとつの材料になってるんだあって、変な言い方だけど、そう思いましたですよ。

伊藤: 水俣のこともそう、澤井さんの、四日市の公害運動なんかの影響もあつたりしたんじゃないかって思われるんですけど。水俣の、鶴見さんが運動に参加したこともあるけど、

竹内: だって、ああいう人たちって、本当にわからないでしょう。その、社会の中の、ほんとの、あたしたちみたいの生活がどうなってるかとか、何をどう思っているかっていうのは、学問の上でしか。その中

ではちょっとわからないんだろうなあって。変な言い方で・・・。そう思ったこともあります。でも鶴見さんの力であたしたちも大変助かったんだからって、操短のときあたしたちが操短で一時帰休させられるんですよ。そんなとき、ほとんどあたしらの仲間が帰されました。昔からあったんですってね、ちょっと不景気になると、今じゃないと思うけど首切りっていう。ちょっと不景気になると、従業員も、機械を止めていらなくなるから、その期間は家に帰して、それっきり呼ばないと。そいでまた、新しい従業員を入れて、ちょっと忙しくなるとね、新しい人たちを入れて。そういう周期があって、回ってきていて、それで帰されていたらしいんです。それがまたやってきて、あ、このときにこの連中を一扫しようと会社は思ったんでしょうね。あたしたちを解雇しようと。それで、それを一時帰休ということで行ったんうちへ返すと。会社が呼ばない限り、またあたしたちをまたここで働かせるーっていうような人は今までいなかったんだと思います。自然にお嫁に就いて辞めてったと。でもそこときに鶴見さんと木下さんが会社に掛け合ってくれたわけですよ。この人たちを、ほんとうに6ヶ月経ったら呼び戻してくれますかっていう。その約束をしてくれて、それで、あたしたちはひとりだったらきつと帰ってこれなんだったけど、そういう仲間たちがいて。普通なら大変悲壮なことですよ、でも、職安で6割の保険をもらって、働かなくて金もらって、職安に就いては顔合わせて、今度はこのときにガリ版きろうかーつってまた集まれるってんで、大変そんな時は楽しかったですよー。

林(正子): ちょうど下伊那ではね、青年運動の50年史をつくる時だったの。その人たちに仲間入りをして原紙を切ったりして。ちょっとだけ原紙切って届けたりしてねえ。その人たちとも交わることが出来たし。

宮崎: 年代でいうといつごろですか？

林(正子): 昭和33年。

宮崎: 30年ごろですか。

竹内: だから、本を出したのも、鶴見さんたちのような有名人の人たちにそういう助けてもらったっていうことは、あたしらを、約束を破ったらもうすぐ世の中に発表されてしまうからね、それが大変会社は怖かった、だからあたしたちは本当に鶴見さんに助けられていますよね。それで、6ヶ月経ったら、悠々と戻って、また働きましたね。

林(正子): 33年の3月から6ヶ月間、それぞれ帰ったんです。・・・・・・1958年。

伊藤: その後あたしらがなんか会を持つていった時、鶴見さんも来ていただいたりして。

宮崎: 鶴見さんご自身は、著作集の中で、女工さん達に批判された、あなたはわたしたちのような生活はわからないって批判されて、それをどう受け止めたらいいのかっていうことで悩んだって書かれてるんですけども、鶴見さん自身が、そういう問題自体を、どう受け止めようとしていたっていうのかな。さっきも鈴木さんがおっしゃったけど、ああいう人たちは学問の上でしかほんとの生活のことはなかなかわからない・・・鶴見さんは、そこをどうやって乗り越えようとしてたのかなあとか、そこを何か感じたことはありました？

竹内: こういうことってたことあるねえ、「じゃああなたたちの労働がわかるために、あたしがあなたたちとおなじ労働をすればいいのか」って。「そこまであたしもやらなきゃ。そりゃあたしもわからないと思うわよー。あたしもそりゃやりたいと思うわよ」っていうようなことをちょっと言ったことあったねー。で、でもあたしが「そいじゃ、それをしたからってどうなるもんでもないでしょう」ってことを、はなし、そんな話をしたってことを思ってます。「エンピツをにぎる主婦」ですか、そういうサークルの中そういう話をしたってことをちょっと聞きましたね。「その中にもいろんな生活者がいるでしょう、だからあなたのその生活をわかるためにはあたしも、それをやらなければわからないわよねえ」とか聞いて。でも、あたしがそれをしてこれからどうなるものでもないしねえっていうような話をちょっと違うなあって、聞いて。あとはわかりません。

宮崎: 今のところ・・・ちょっと聞いていいです？

竹内：だから、あの、いろんな会にいつも、鶴見さんは参加して、いろんな会に出ていますよね。で、わたしが、こんなあたしらみたいなのところにいつも来てくれて、悪いなって思いながらいたけど。「行くわよー」って、毎回よく出席してもらったし。そしてあたしたちのうちを一軒一軒回って歩いたよねー。

宮崎：家ってというのは、伊那の・・・？

竹内：あたしたちの住んでるところ。(伊那・現在の家)

伊藤：あたしたちの生まれのね、(嫁ぐ前・実家にも)

竹内：一軒一軒どんなところにもね、

宮崎：退職されてからの話ですか。

伊藤：畑とか、どんな生活をしてるか知りたかったと思うんですけど、畑とか見てもらったりしたこともありました。どんな・・・感じに、住んどったのとか。主人に会ってもらったりですか。

竹内：そんなときの、畑の中に入って行って、そんなん入って悪い、靴替えて入ってもらいたいって言ったから、「いいわよいいわよー」なんつってどどん畑の中入っていったりねー。あたし、ああいうことはなかなかできないことかなみたいに思ったのかな。

伊藤：なんかね。いっしょになろうっていう気持ちがあったような人だったなっていう気がします。それで集まりん時には、たとえばあたしたちが林檎の皮を剥いて出そうとしたときに、いっしょになって剥いてくれたり。そういうのと、一緒になんかやりたいなっていう、うんとかう近づきたい、自分もその中に入りたいていうような努力をうんとされていたような気がします。そして、世田谷じゃないや・・・練馬!のおうちのときに、あたしたちが劇団の人たちが、公演したときに、あたしたちの芝居をそっちでしたときがあって、皆さん来てくださいつつて、おうちに、お邪魔したことがあると思うんですけど。結構たくさんごちそうを出してくれて、とつてもそんなとき幸せだなあとか思って、かえてきたんですけれども。こういう先生がこんなに身近にあたしたちを招待してくれるなんていうのは普通あり得ないと思ったりしていたんですけれども。そんなときはとても幸せを感じて、帰ってきたんです。

竹内：お父さんといっしょに住んでた、プール付の家っちゅーか、そんな大きなところに、あたしたち、泊めてもらったこともありましたよね。でも、なんとなくこっちの方がいづらかったけど。そりゃもう立派なベッドで休ましてくれましたけれどね。あたしこそ、みんなこういうところに住んでるんだーって。まだお父さん健全でね、「この人たち生活記録の方よー」とか言ってお父さんに紹介されて、あたしらもうわからん、小さくなってましたけど。

林(正子)：それで鶴見さんもお父さんを看病したので、なんとなく、あたしたちに近づいたっていう、そういう体験を持ったってこともあった。

竹内：お父さんを、鶴見さんはお父さんを見て、「親を、最期まで見届けてこそ一人前の人間になれるんだよ」っていうことを言いましたよね。

林(正子)：なんか、あたしたちが良くわからないモヤモヤしたものを、ちゃんと理論的に理論つけてくれるもんで、そうなんだって思いで・・・。

竹内・伊藤：そうだったよなー。

竹内：難しかったよねー。

林(正子)・伊藤：そうか、そういうことだったのかちゅーて・・・思うたりして。

竹内：だからそういう意味で鶴見さんはえらい人だったと思う。ほんとに。その、社会・・・生まれなんかも全然違うでしょー、でもほんとにみんなの中に入って、一番底辺の生活者のところをちゃんと汲み取って、ほんとに学問にしてっただのはえらい。なかなか今までの人たちの中ではちゃんとやれなかったんじゃないかなあって思うけれども。

宮崎：自分たちのもやもやしたところを、理論的に整理して下さったっていうのは、たとえば、具体的に思い出すエピソードっていうものはありますか？

林(正子)：なにもかもみんなって言うか・・・なにもかもみんなちゃんと理論付けて話してくれるんで、

お互いに生活記録を書いて、それについて話し合う中で、人の意見を聞くと、こういう意見はおかしいとか、これはこういう風に考えるんじゃないかなどとかね、そういうことをお互いに話し合っ、それで変わってはきとると思う、変わってはきたんだけど。でもやっぱり鶴見さんは違って、もっと一本筋の通った理論っていうか、そういうことをすっきりと話してくれた気がするんだけど。

伊藤：今度、今まではね、「私の家」とか「母の歴史」を書くときに、ただ思ったありのままを書くだけだったけど、今度はこちら、みんなそれぞれ結婚してるから、鶴見さんの出してくれた提案っていうかそういうのは、年号をおって、昭和何年にどういうことがあって、そのときには自分はどういうことをしていたのかっていう風に、年号をおって、そのときの時代はどういう事件があって、どういうことがあったっていう、その中で自分はどうしてたっていうような風には書けばいいんじゃないかって言われたときがあったんですけども、ついついそれが果たせなくて、切っちゃって、難しいねっとかいって。まあ、その、年表をもとに自分史を書いたらいい、と言って色川大吉先生の本の紹介もしてくれたりしたが、毎日毎日日記でもなんでもそう、書きとめておくその時間がなくて。書けなかったもんで、年代を追ってなにがあつてとかも、そういう風なものがついつい。そういう風におつていけば書けるんじゃないかとか言われたんだけど、果たせなくて来ちゃった。

宮崎：よろしいですか、工場時代の話が終わって、飯田時代に退職されてからの話にいこうと思うんですけども、よろしい？

竹内：ごめんなさい、なんかもういったりきたり。まとまらなくてねえ。

伊藤：恥ずかしいんですけども、生活に追われてそれっきり・・・精一杯で。頭ん中で仕事をしながらこうだとかって断片的にこう思い浮かんで、断片的でもいいんだ、仕事しながら書き留めれるんならって思っても、そいがなかなか書けないんでねー。

宮崎：人それぞれ、退職された後は違いますよね。退職されたのは、結婚がきっかけなのでしょう。

竹内：そうですね。

宮崎：その形で戻られるというのが多かったんですか？そうするとやはり、みなさん 50 年代末にはもうこちらに・・・昭和 30 年代にはこちらにいらっしゃったんでしょうか？

竹内：そうですね。40 年代になったらひとりだけでした。会社にいたのは、みやちゃん。

宮崎：昭和 40 年代に一人だけ残った。

竹内：その人もいずれ辞めてきました。だから全然、みんな辞めた。澤井さん一人残してみんな。それぞれ・・・

宮崎：退職されていくと、生活記録の運動も担い手がなくなっていったっていうことですね。

竹内：会社の中ではね。

宮崎：会社の中ではね、減っていくわけですね。サークルも、人数がいなくなるから、下火になっていくわけですね。

竹内：でも、会社の中ではそういう活動できる状態では無かったっていうことでした。そして組合、労働組合自体が会社の、今度はお前組合長なれよ、お前もう書記になれよ、まあどこでもそうですが、組合役員をしたものは将来会社の重役になれるとか、・・・というような形にどんどんかわってしまったから。

宮崎：組合自体が御用組合になってしまったと。

林(正子)：はい。

宮崎：そして、こちらに戻ってこられてからなんですけれども、どんな風にこちらの生活がスタートしていったんでしょうか？

竹内：そこが痛いトコなんです。よ。

宮崎：痛いところというのは、そう簡単には、スムーズにはこちらに・・・

竹内：あのね、

林(正子)：歴史は繰り返されない、とかいって。力んで帰ってきたけど、同じように「母の歴史」を繰り返

返してるんじゃないかなあって。

竹内：いつも思いましたよねえ。その、かえって昔の、会社にいた頃はお母さんのこと批判してたけれども、家に帰ってきて、てか村に帰ってきて自分の、母親になったときに、初めて、ああ、お母さんたちって偉かったんだなあって。いうことですよね。・・・そいで、会社にいたときは、女だってあたしは一人の人間よって行って威張っていたけど、そういうことにもなれなかったっていうか。そのね、あたしもうひとついけないことと思うんだけど、わたし達はサークル活動をして、他人を大事にしてたっていうか。

伊藤：気を使ってた、うんとお人よしだったっていうか。

竹内：自分の主張は、今でもそうだけど、あんまり主張しすぎると離れていくじゃないですか。だいたい、ひかれてしまうっていうか。それで、何でも相手に合せて、いい人になってしまった。私達は母の歴史は繰り返さない。結婚したらいいお母さんになるうってというのが、あたしらの合言葉だったよねえ。

林(正子)：うん。

竹内：それで村の中に帰ってきた。そして、うんと活動しようと思って帰ってきたけれど、村の中でボツンって入れられてみると、一人、その派手に主張すると、却って目立って、あのところの嫁さんはねっかえりだでーって、すぐレッテルを押されるわけですよ。今はまだちょっと違うけれど、その頃は。だから浮き上がってはだめだと。それでも、とにかく生まれたとこの親がもう、とにかくもう嫁に行ったらお母さんの言うこと聞いてなーっ、なんにも口答えはするじゃねえぞー。もう村歩くとき電信柱にお辞儀をするくらいにして、その村の中に入っていい嫁様にならなければだめだ、と言ってしつけられてきたので、会社にいたときはそんなのないわって思ったけど、村に来てみたらやっぱり、ここで浮き上がってみんなの批判的になってもいけないんだと言って、自分を殺しましたね。そこが間違ってたんだなあって今思います。自分を主張しなかったから。

伊藤：そうです、あたしもそうです。わたしも明治のなんとか言いながら結局、わたしは明治の女をやってきたかなあって思ってます。あれだけのことを四日市で主張したり活動したりしながら、こちらに、伊那の方に帰ってきててもあたしは明治の女をやったんだなあ、「母の歴史」は繰り返さないぞと言ったあたしが明治の女をやったんだ・・・

竹内：会社で、中で学んだことは、1つこういえば、すぐこういう、他方からあの、こういうのははねっかえりが来る、批判される・・・だからこういうことしたら損だ、損だとまで言ったらちょっと良くないんだけれども、だから、結局行き詰る。動きが取れなくなるから、そういうのは辞めなきゃいけないっていうことも学んできましたよね。だから、みんなにやっぱり信用される、いい嫁になるっていうことを心がけてしまいました。

伊藤：それをしすぎちゃったかなっていう風に、今は思ってます。

竹内：ほんとのことをいうとね、だからもっと・・・

竹内：みんなは違うよねえ、わたしら農家、ちょっと、専業農家に入ってしまったんでね、

宮崎：そうなんですか。

林(正子)：お舅さんにもちゃんと仕えて、あたしみたいにお舅さんに仕えたことのない人は、お友達からそんな人に分かりっこないって言われるけれども、そういう気持ちはわかりっこないし・・・自分のやりたいようにやりたい事をやってきたけど。結局は・・・村で何か活躍するとか、なにに影響するとかいうことは、出来なかった気がする。いいお母さんだけになっと思ったと思うけど・・・。

宮崎：こちらに戻られてからも、皆さんのつながりはずっとあったわけですよね。

竹内：はい。

宮崎：こんな形で集まって、そういう苦勞をお互い話し合ってたっていうことは無いんですか? 「母の歴史」を繰り返しそんな自分、そんなときに仲間って必要だったのだろうと思うんだけど、そのつながりはどうだったんでしょうか。

竹内：あのね、こんなこと言って逃げちゃダメなんだろうけど、やっぱり生活に追われちゃうわけです

よ。だから、書かないし。ほんとはいけないんだよね。会ったら、楽しい、ワーッと普通の同級会、気分？いつも、書こう書こうって合言葉はあるんだけど、なかなか書けないっていう繰り返しをして。ほんとにそれは、申し訳ないと思ってます。あ、ぼつんぼつんって、いくらかは書いてたと思うけど。

林(正子): 記録通信として澤井さんがみんなの書いたものや手紙をまとめて送ってくれたので、大体仲間の人とかの消息っていうのはわかってる。5年にいっぺんだとか、今は3年2年とか結構集まるんですけど、だいたいわかってて。そこで書こうっていう話になって終わるんだけども。そういう風にずーっと40年間、45年間？ずーっと続いてはきとる。

宮崎: 実際地域に帰ってきて、あそこの嫁ははねっかえりだとかいわれる、ということはやはり皆さんの目から見て、不合理な点がいっぱいあって、どうしても言いたくなるような点があったわけですよ。戻ってきて見えることってたくさんあったんですよ、たぶんね。

竹内: そうですね。

宮崎: どんなどころで一番言わざるを得なかったんでしょうね、それもいわなくなっちゃうんだけど、言わざるを得ないっていうような思いをたぶん持たれたと思うんですけど、

竹内: 何も言わなくなったっていうこと？

宮崎: 四日市から戻ってきて、最初は少し言ってみたわけですよ。言ってみたときに、まわりにレッテル貼られちゃったっていうことから、最初どんなことから声を出されたのかなあって思うんですけども・・・。

竹内: もう今度は個々の、個人的なことになっていくわけけれども、あたしはうちに帰って、すぐ、選挙があって、市会議員だったかな、その集会があって、あたしも来いって言われたわけですよ。そしたら、誰も・・・やっぱ珍しいわけですよ！あたし、そんな娘が一人、そのそれはもう共産党の選挙の事務所だったんでね、そんで行ってまあ座ってて、そしたらすぐどここの娘や一会に来たぜーっていうのはすぐ反響として回る。で、うちの父が「お前もうあんなとこ行くんじゃねえ」って言われたことはありましたよね。うん。だから、「そうかい」っていうようなので終わったけれども、それで、その後、あたしが結婚したのは、共産党員です、主人は党員だけど、あたしは党員じゃない。だからわたしは普通の人だ。でも、そのとき自分で思ったのは、絶対でも、よくねー活動した人たちが結婚すると、あの党員のひと。そのダンナの足を引っ張る、もう辞める辞めるということになるっていうことをよく聞いていたので、まあ、あたしはそれだけはしないでおう。足だけは引っ張らないぞと思いました。ところが、あたしの主人たちは随分割り切っていて、どんなどきでも活動してるんですよ。そのことを私の親しい人が、共産党の批判をして、あーだこーだ村中がこう言ってる、ああいう風に言っている、そのたびに大変なんだっていうことを入れてくれるわけですよ。あたしはそれに震え上がったっていうか、そんなことでもう。お父さんはいくらでもやればいいと思いました。そんな時、党からの誘いもうんとありました。でも、今度は誘われれば誘われるほど、こっちはもう意地になって、あたしはもう自分の意志ではいるなら入るけど、言われては入らないつって、ずっと通してきた。まあ今もそうなんですけど。お父さんがそういう活動をするので、どうしても仕事の方がおろそかになる、手薄になるから、今度はその、あたしが農作業なんかを一生懸命やらねばならないっていうようなことで。そしてそれから子どもの世話やいろんなことで、もう～それで新しい生活に入ったのと。その姑様に、とにかくじょうずにやっていこうと、お姑さんの気持ちを汲んで、やっていこうということで、もう・・・それだけがいっぱい。アタシは今生活をするということが一番なんだからそれを優先する・・・と。少しは書いていたようなんですけど、もう、あの、こまりましたね・・・で、今考えてみると、いや、違ってたんだ、で、あの時は党とかそういうことを別に、他の面にもどんどん出てって、活動・・・いや、ほんとにそういう状態じゃないですよー。ほんとにほんとに、毎日忙しくて。そんなところに出て行かれることはなかったんけれども、そういうことを積極的にどっかに、やっぱりもっとなればいけなかったな、と今反省してます。

木下: 戻ってきてから集会とか・・・

竹内：それはやりました。それは、若妻会の中で、若妻会っていうのは、お嫁さんばかりが集まって、何かするっていう、公民館が主体になってやる会ってだったんですよ。そんな中で、読書会やろうよってみんなに呼びかけて。読書会もしまして。学校の先生に、ちょっと来ていただいて。それでちょっと話会を持ったり。そういうことは、一応やりました、結構読書会がいろいろあって、ちょっと、みんなが見に来てくれたりっていうのはありましたけれどね。でも、それ以上のことを、また、自分から進んでやろうというようなことにはならなかったことです。

木下：活動自体を・・・(?)・・・仲間といっしょにやりきっていく全部の経験や思い、・・・(?)・・・そういう気持ちのつながりってあるのでしょうか？

竹内：こういうつながりじゃなくて、また別の？

木下：また別の、つながりを求めているっていうのは、もともとは皆さんが工場でつながったつながりと、地縁というつながりを地域で求めていく、ひとつの、もとの、いい経験っていうか、そういったつながりがある？(?)

竹内：それはあると思ってます。その読書会でもまあ、わたしがそうやって、呼びかけてやって、一応その今までの読書会っていうのは、本当にただ本を読んで、退屈な、それは学級といつてなんかやらなきゃならない、形だけの読書会だったけど、本を通して、そこから何を感じるの？あたし達もこういうことあったよね、あたし達もこうなんだよねっていう、自分たちの生活を、本に、なんていうか、対比させて、みんなといっしょに話できるとか。そういう事で、これで良かったんだなって思う。そして楽しく読書会が出来たっていうのが、それが今までやってきた経験が、これをしてしてくれてるんだなって、感じましたね。

木下：たとえば、どんなようなストーリー？

竹内：それまでは、覚えてないですよ。だから特殊な本を読むとか、そういうのじゃ・・・

木下：小説みたいのから、歴史物まで？

竹内：歴史じゃないもう、ありきたりな普通のものですよね、それはもう普通の。特別なものをやるとやっぱり離れていくし、なんであったかちょっともう、30年位前から覚えてないけれども・・・さきちゃんたち、まだいろいろやってんじゃん。

林(正子)：伊賀良に婦人会・若妻会があったが、役員になると大変だとか、特別何の為にともなりそうもない等の理由で脱退していた。S46年三尋石団地に住んでいたということもあって、子どもの本の研究会とか、三尋石子ども文庫とか、そういうことに係わって・・・始めに、ガリ版ずりの、通信出したら、学校の先生がガリ版切れる人あるんやーって、夏休み公園で読み聞かせをするとかねえ、そういうことは子どもがずっと大きくなるまで、かかわった母親の読書会をしていた人たちが、地域に子ども文庫作って、子ども達に読み聞かせとか本の貸し出しやったり、子ども劇場の、発足には保母さん達と連絡会を作って立ちあげたり、やっぱり仲間の中で、文集、作ったり話し合ったことや、決めたことをみんなに知らせることをして、そういう方向っていうのは仲間の中で鍛えられたのかなあって思うとるんだけど。

伊藤：私の場合は、村の中の婦人会があり、それから農協の関係の婦人部もあり、両方入ってたんですけどもね、とくに自分が役員を受けたときに、際立ってこの方針で行こうっていうのは、1年間だけでしたからできなくて、前からやってきた人のを、そのままやったくらいで。農協の方の婦人部のほうは、同じ役員の人たちが出ていた会合の中で、こういうことを、こういうところから頼んで、農村とか盛り上げていけばいいんじゃないのっていうときに、それが、ちょっとまずいんじゃないかっていう風に対しての意見を、そういえば、戦争につながるじゃないけれど、戦争につながらないのとか、ひき出してきたときに、反対して、っていう程度のものでしかなかったけれど。あとはまあ自主活動の中ですけれども、新婦人の会って、その会で、新聞取ったりしながら、自分たちの班の、活動の方針を立てて、まあ学校の先生にお願いして読書会とか、それから、村の歴史とかそういうのを知ってる人にお願いして、自分の住んでる村の、歴史とかの、お話をお聞きするような、その程度のことをやった。その間は、気持ちはつながりましたけど、旦那さんが町会議員に選ばれて農業に手が廻らない、そんな家へ手伝いに行ったり、私が具合が悪かった時など、その仲間の人が来てくれた。生活の面で支え合っていた。また、革新的な人を

選挙に出すために会社を一日休んで運動に歩いたりもした。家庭の中では、理解を得られる家庭では無かったので、夜、全部家の中が良いようにして勉強会にも出掛けたりして、若い頃のやってきた事を失わない様な努力をした。そこには、いつも母の歴史はくり返さないようにしようという一本の柱があったと思う。生活の面では一家の支え手であり身を粉にして働いた。・・・60歳くらいまでは出来たんですけど、それ以降は、いろいろ個人個人の考え方のことや、生活の忙しさや事情があって解散。まちの方の、婦人の団体の関係で、婦人会の部門があって、そっちのほうで参加して、ちょっと、地方自治じゃないけど、女性議員を出したり、今の人の考え方でできんことを、わしらがやったり、町の行政へ要望を出したりしているような状態で、活動もえらい活発的だったかなあ。その中でも、支え手になってうちの中を盛り上げてく、そっちのマイナス面を、あたしがプラスにしていって、一応盛り上げてく。そういう支え手になった、っていうくらいのこと。あたしはほんとに、こんだけ生きてて何にも出来なかったなあって。もう、働きて一手で、そういう生活で終わってしまうのかなあって思って、生きてきたところです。・・・でも、仲間たちと一緒に活動してきたこと、教えられたことはそのことが基本になっていて、絶対どこまで行っても頑張れるんだよってこととか思ったりしてるんです。それで、いま老老介護とかって言われていますけど、自分でもいくらか不具者のようなもんだけど、そういうところ行って、自分の地域のですけど、地区社協の、そういうところの集まりを自分たちの主催でやるのも、お年寄りを集めて茶飲み会くらいのことしているんですけど、そういうところで歌の指導をしてくれないってそういうときに、あのコーラスの、自分らでやった歌の。わたしが最初に、唄いだしながらみんなをひっぱって全体で唄うような、それはあたたしちが仲間のときに教わったことだからできるのかなあっていう、迷わずできるっていう、そういうようなのがあって。だから、でも、仲間の人たちがやったことは、もう絶対あんとときに頑張れたから、今、そういうことが生きてるのかなあ、って思ってます。

竹内：書くことの中でね、書いて、どうして、どうしてなのという、ほんとうのことを書いて。あの、じゃあなんだ、それからどうなんだ。そういう追求する気持ち。ただ書くってことじゃなくて、次はどうなんだい？じゃあこれはどうしたんだい？っていうものを持つていうことを、あたし達の中でやってたんですよ。だから、ひとつのことを、みんなそうだと思うんだけど、なにか持ち上がったときに、これは、本当にいいことなのかなあ、いや、ちょっと違うんじゃないかのかなっていう・・・確かな目を持つていうことを、あたしち生活記録で学んだなって思うんですよ。だから、みんながそれは生活の上で役立っているんじゃないかっていうことを、いつも感じているんだけど。あの、ほんとに書いてないことの、言い訳になって申し訳ないけど、それがあたしの生活の基礎になっているとは、本当に思います。だから、書くっていうことは、ほんとにだいじなこと。書いてみると、何かに行き詰ったときにそれを書いていると、これは一体どうしたらいいのか、そしてそれをじゃあ自分は、これからどういう風に思い、そうやっていくことがいいことなのかなあっていうのを、自分で書くことによって整理できるか、前に進めるっていう、そういうことはほんとにあるっていうことを、感じていますよね。

榊：ちょっと印象的な言い方にちょっとなっちゃうんだけど、鈴木さんと伊藤さんが、たとえば申し訳ないっていうような言いかたをちょっとされてね、そういう風におっしゃること自体が、ちょっと意外だったんです。申し訳ないっていうのは、もっとこうすりゃいいっていう話、伊藤さんもされたんだけど、そこはまずかったんだっていう、少し否定的な感じで、ことらに帰ってからの生活を捉えられてるんですけど、さっき木下さんの質問に答えられた話を何うと、読書会やられたり様々に活動されてて、十分こちらでもできることはやっていらしゃった気もしたんだけど。それでもなお、申し訳ないっていうか、うまくできなかったんだって言われるのは、もっと理想が高いところにあったのですか。

竹内：ええ、まあ。それはあたしもちょっと否定しているんですけど、その・・・なんていうのかな、大きな役を持って、・・・なんです、その・・・村でいう、市の環境部会の・・・会長をしていますとか、それでなににの長をしております、そいでどこどこ行って婦人会の、市の会長をしておりますとか、そういうこと、そこでそういう役を持って、まあ活動するっていう・・・活動なんでしょうね。まあ、あたしからしてみれば、毎年同じことしかしてないんじゃないかって思うんだけど、とにかくそれはえらいことで

すよ、そういうところの人たちがえらくて、そういうところになることが、なんていうのか、評価されて、またあたしらもその、ねえ、女だって人間なんだ、あたしらも村に帰ったら活動するんだってことまで言わないんですけど、結局そういうことまで含んでいて、うんと活発にやるうってというような、変な話だけど、変なことを書いたために、よそから期待をされているんじゃないかっていう負い目もあって。それが、できなかったっていう、偉そうなことをいったって、なんにもやってないじゃないかって。確かにやってない、だから、そういうことは、ただ言っただけで、実行してないから申し訳ないという、そういうことなんです。自分の生活に追われて。でも、その一方で、そういう役をしたり、まあそりゃ市会議員なんかにてたりしたら確かにえらいんだろうと。でも、あたしら生活記録をやってきたものが、そういうことをやるだけが活動なんだろうかっていう疑問もあります。ほんとに隣のオバサマ達と、うまくやって。今度の選挙は誰を書く？ん？それは違うんだよ、こっちを書くとか、あっちを書くとか、この人が書いていることは、あの人はこういうことを主張しているんだから、この人のほうがいいじゃないって話し合える、そういうのが、あたしらは活動だと思っているので、あの、それでいいんじゃないかねえって・・・う～ん、思ったりして。まあ今のところ、ちょっと農業が大変です。だからどうしても農業だけじゃやってけないので、お父さんが専業なら、よそから、まあ例えば具体的な話をするとか、あたしは果樹をしていますので、そうすると忙しいときは人を頼まなければならぬ。だったらその人たちに払う給料というものを、農業の生産にしたほうから出ないんです。、その人たちに払う給料ってのをどっから出すたら、あたしが外から稼いできて、その人たちにやらなきゃならないって、そうでなきゃ借金になってしまうから、借金だけはしたくないので、まあこれをあたしは出稼ぎといっていますが、あたしが出稼ぎをしなければならぬという、これが農業の実態です。今は、でそういうことで一生懸命自分の体を使って生活してきましたので、定年になり会社に行かなくて年金をもらうことによって、その年金を働いてくれる人たちに払えば、まあなんとかなるだろうと。だからあたしは今度、年金をもらうようになったら一生懸命やる！地方にも出て行こう、活動もしよう、自分の趣味もしようって、そういう、それをもう大変期待して、やりましたけど。やってみると、やっぱり農業は忙しいです。どんなにしても、仕事はいっぱいあるし、あたしのやりたかった趣味も半分くらいにしかできない、それでも、お前さん外ばっか歩いてるねって、うちの兄弟にも言われますけど。まあ出るころはでしょう。あたしが出たいところは出ようと思って、今は一生懸命出ていきます。この人も言ってるけど、今までの分を取り戻そうって張り切って出てみたけれど、もう本当にその半分もやれません。思った半分も。でもま、できるだけ一生懸命。で、そういうこともあって、またこういうことも出てきました。

林(正子): ほんと～感謝してます。

竹内: うそばかりー

伊藤: 勉強になりました(笑) いい刺激を与えていただいて、思い出したりして良かったです。

竹内: この人たち、ちょっとねー、何かあって来られたあと話すだけで、だから行かないでおこうか、どうする？っていったね。

林(正子): ありがとうございます(笑)

竹内: だから仕事ばかりでなく、外に出ようと思って。その点活動していたおかげだと思うんだけど、あたしらは主人も、そういう好きなことやってんだから、あたしが好きなことやっていても、なんにも文句言いません。いくら忙しくても。「行くよ」って言えば、「ああそうかい」ってなもんでね。ただ自分の判断で、あれもしなきゃならん、これもしなきゃならんけど、まあ行こうよって言って、出てきたようなわけで。だからもう行くところは行こうかなと思って今はやっています。だからそれも、生活記録やってた、でね、それもこの年代でね、でも今の女の人たちはみんな強いですよ。活動してるのは、女の人ばかりですもの。男の人はほんとに出てきませんものね、いろいろに。あたしらの年代、何をやっても元気がいいのはほんとに女の人です、今は。わたしばかりじゃなくて。でも、その元気のよさも、いくらか。あの、なんていうのかな、考える？わたしの思う、これは大事っていう活動のために、出て行こうと。まわりの人たちは、農業しながら毎日忙しいのに偉いねって、言ってくれます。ま、そんなとこかなあ。

(以下略)